

案山子の恋歌—前書

若い頃演歌の作詞家を夢に見ていたことがあった。唄というものはとかく人の感情を根底から揺り動かすパワーを持っているものだと考えていたから、そんな歌詞を作って人々の心を動かすことを夢見ていたのである。しかし広告代理店の制作チームへ配属されてからは、忙しさにかまけて、そんな夢はいつしか昔々の物語に変わって行った。ところが制作チームを離れて営業に出てみると、心の奥底で眠っていた夢が目を覚ました。暇を見つけては寝言のような詩を書き留めるようになったのである。

ところで三十一文字からなる日本古来の短歌に現代女性の新しい感性を吹き込んだのは俵万智という若い女性であった。もう30年以上も昔のことである。5音と7音とからなる日本語独特の韻というよりもリズムを持った表現方法は、現代日本語においては、必ずしも容易な手法ではない。しかし彼女はそんなことなどものともせず、新しい領域を見事に開拓した。今からもう30年以上前のことである。

実際5音と7音の積み重ねで、何らかのストーリーを表現して行くとなると、実にさまざまな困難に突き当たってしまう。ひとつはボキャブラリーそのものが制限されてくると、もうひとつは文字数を整える働きをしてくれる、助詞・助動詞の類が、現代日本語においては退化してしまい、「なりにけり」的な表現は現代の日本語においては、しっくりと馴染めないのである。多分こうした表現は中世の和歌全盛の中で、急成長を遂げた手法のような気がする。現代の日本語はあたかも定型詩を拒否しているように思えてくるのである。それゆえに定型詩への挑戦はやりがいもあったし苦勞もあった。

形式はさておき次は内容である。今回作詞するにあたって、この詩をあえて歌謡曲の歌詞的なものとして位置づけた。もちろん趣味的な分野、純文学的

な分野における詩は、無限の可能性を秘めているのであろうが、もはやそれは小生の年齢や過去の足跡からして、極めて非現実的と言わざるを得なかった。従ってここに登場してくる詩は言ってみれば、この物質文明の中にあっては、ある種の消耗品に過ぎない。若者がふと人生に挫折したとき、はたまた中高年者が若き日を思い出す、ひとつの縁とするような、まっ、大人の子守唄みたいなものであると同時に、心につける傷薬みたいなものでもあった。

しかしよくよく読み返してみると、現代の若者から見れば、暗くてかつ湿っぽい内容で、クソ面白くもないと思われたが、男女の恋愛、別れをテーマとしたものなんて、所詮こんなものかと、自分を納得させた次第である。

実際、洋の東西を広く見渡せば、愛と別れをテーマとしたものは極めて多い。例えばビートルズの『MICHELL』や『YESTERDAY』など、歌い継がれているものは別れがテーマとなっているし、結婚式でもしばしば歌われる谷村新司の『いい日旅立ち』も実は別れの曲なのである。その証拠には2コーラスめに『わたしは今から思い出をつくるため、砂に枯れ木でかくつもりさよならと』とあり『ああ日本のどこかでわたしを待ってる人がいる』と続くのである。小生もできる限り愛と別れ、人生のターニングポイントに的を絞ってみることにしたのもこんなところにも理由があった。

確かに愛と別れは人生の永遠のテーマであり、大げさに言えば全人類共通のテーマでもあるのだが、団塊の世代の後先で日本人の精神的価値概念は大いに変化している。同じ別れを語るにしても団塊以前と団塊以後とでは大いに異なる。例えば阿久悠の『女がひとり』では、『北国の室蘭 あの人が住む所 今日からは私もそっと あなたの側で眠る 女の意地でつかんだ恋を いつまでもこわさず 夜霧よどうか 包んでいて』と歌っているのに対して、松谷任由実の『GOOD LUCK AND GOOD BYE』の中で、『なつかしいあの人に人ごみの中で会った 微笑む顔が少しはにかむの 昔のまままだわ 傷ついた

恋なのに もう跡形もないのよ 偶然会えたら 泣き出しちゃうと思っていたのに』というぐらいの違いがあるのである。

団塊の世代を境にして、日本人は儒教的な倫理観の呪縛から解放されて、新たな概念を模索し始めた。この例のごとく、世代が変わると別れたあとの対応が、こうまで違って来るのだ。このことは現実に演歌の凋落というかたちで現れている。事実演歌全体のCDの売り上げが、ひところ安室一人のそれに適わなかったのである。実に象徴的ではあるのだが、かの美空ひばりの死は、演歌全体の死でもあったともいえよう。そしてまたひばりの死後、演歌の作詞家も作曲家も、新たな時代へのチャレンジを怠ってきたような気がしてならない。今回歌謡曲的な作詞をあえて定型でチャレンジした理由は、こんな背景もあったのである。『心は演歌。言葉遣いは団塊以降。』を目標としたが、不思議なことに定型で作詞すると、その内容はさておき、多かれ少なかれ演歌っぽく見えてくる。これが日本人の情念とでも言うべきものなのだろうか。こんなところからも日本人と演歌との歴史的な関わりを伺い知ることが、できるような気がしてならない。日本人はまだまだ演歌から完全には解放されることはないのである。

とはいえ団塊の世代から団塊ジュニアの世代にいたる、極めて広い世代にわたって、ユーミン派が拡大し、更に最近ではその後の世代になって、沖縄系の歌手による歌が大きな力になってテンポのよい、リズムカルな音楽が確立されて来たといえようか。しかし彼達は単なるシンガーであって作詞や作曲を手がけるわけではない。彼達とさらにそれ以降の世代の人気の背景は、むしろ花やかなステージとショービジネスに徹した演出効果によるもので、いわばビジュアル志向の時代に育った世代の環境から来るものと見た方が良かろう。松任谷に話を戻せば彼女の登場はちょうど日本の女性が社会的にも自立し、いわば自立する女性たちの世界や時代性を、巧みにその歌詞の中に取り込み、

その点がまず若い女性の支持を集めて、更にその子供たちの世代へと及んでいったものと見ることができよう。ともあれ松任谷は現代歌謡曲の新しい方向性を示し、その親の世代がひきずってきた古い道徳律のような心のしがらみを、いともあっさりと乗り越えてしまったのである。彼女の世界は音楽的な、あるいは作詞的な見地よりも、むしろ社会学的な見地から捉え直してみた方が、分かりやすい気がするし、重要であると思うのである。

そしてもうひとつ社会学的な見地から分析してみたいのは、テレビ番組の中から歌番組が消えてしまったという事実である。その理由はひとことで言えば視聴率の低迷ということになるのだが、その背景はスマートフォンやパソコン等によるダウンロードであった。しかもスマートフォンの維持費はどんどん安くなり、この影響は実にCDの売り上げの減少という形でも現れており、今では一曲数十円で、スマートフォンにダウンロードできる仕組みまでも成り立っている。これは経済的な側面に他ならないのだが、テレビを見る時間が、以前よりも明らかに少なくなっているのも事実である。友人同士、安価でたやすくコミュニケーションできる手段が増えるに連れて、時間の配分にも変化が生まれているのである。しかし今後も新しい通信手段等が作り出すある種の文化は、予断を許さないものがあると思われてならない。しかもこれはパソコンとからめると計り知れない破壊力を持っているわけだから、まさに社会変革の中心的存在と見るべきなのだろう。というよりも現代は産業革命の真っ只中の時代なのである。

筆者の世代はこうした激変の中を生きてきたわけだが、そうそう簡単に新しい世代に同化できるわけでもない。古い頭を少々タワシで洗って、鉛筆をなめなめ書き上げた詩を、恥ずかしながらここにご披露する次第である。

